

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期活動報告
(2009 年 7 月～9 月)

< 目 次 >

はじめに

1. ドイツ連邦レベル等での学術・高等教育動向

- 1-1 先端研究 2010 年度予算が採択
- 1-2 新任教授数が減少－女性教授は更に減
- 1-3 エクセレンス・イニシアティブ新たなフェーズへ
- 1-4 ドイツ医学博士号の質に疑問
- 1-5 ドイツ研究協会 (DFG) 研究助成ランキングを発表

2. ボン研究連絡センターの活動

- 2-1 ドイツ研究協会 (DFG) 年次総会出席
- 2-2 ゼンケンベルク自然博物館訪問
- 2-3 ボン大学サマースクール開講式出席
- 2-4 フンボルト財団 (AvH) 主催フェロー派遣前オリエンテーション及び情報交換会出席
- 2-5 JSPS Abend (ボンセンター年次活動報告会) 開催
- 2-6 ケルン日本文化会館主催・JSPS 共催シンポジウム開催
- 2-7 前ボン研究連絡センター長田中靖郎先生外務大臣表彰授賞式出席
- 2-8 ドイツ語圏日本研究者会議参加
- 2-9 その他来訪&訪問、会議出席等
- 2-10 その他の活動

3. 今後の予定

4. センター長雑感

はじめに

日本での衆議院総選挙から遅れること 1 月、ドイツでも連邦議会総選挙が行われました。社会民主党 (SPD) は大幅に議席を減らし、キリスト教民主・社会同盟 (CDU/CSU) と SPD の大連立政権は解消され、CDU/CSU と自由民主党 (FDP) の新たな連立政権がドイツのかじ取りを担います。

新たな連立協定では、経済・社会の将来的発展の必須の前提となる教育・研究を最重要政策分野のひとつに掲げ、大学や研究関係の具体的施策としては、連邦の教育研究予算を年間 30 億ユーロ増額することが公約とされております。アネッテ・シャヴァーン連邦教育研究大臣の留任も決まり、前政権と各州が確約した 180 億ユーロに上る大学と研究への支援 (大学協定 II、エクセレンス・イニシアティブ、研究と技術革新のための協定) は引き続き実施されることになります。

失業や少子高齢化対策等、折からの経済危機と相まって厳しい財政状況は日本と変わりませんが、未来と知への投資に対しては、ドイツの積極性が際立って見えます。

(宮元)

1. ドイツ連邦レベル等での学術・高等教育動向

1-1 先端研究 2010 年度予算が採択

dpa Kulturpolitik Nr.25/ p.6-7 2009 年 6 月 15 日参照

折からの厳しい財政状況のなか、6 月 8 日、連邦と州の研究担当大臣による総合学術会議 (GWK) の決議により、2010 年ドイツ研究協会 (DFG) とマックス・プランク研究協会 (MPG) は、本年度比 3% 増の総額 35 億ユーロの助成を受けることとなった。

DFG には助成金の 3 分の 2 に当たる 23 億ユーロが配分される。その内、約 15 億ユーロは「研究と技術革新の協定」で確約された基礎研究への助成にあてられ、2009 年度比で 3% 増加した。その他、研究用大型機材のための助成金やエクセレンス・イニシアティブ遂行を支援するための特別資金、約 7 億 3600 万ユーロが DFG の予算として配分される。一方、MPG は 12 億ユーロが配分され、これも前年度比 3% 増となった。助成金は連邦と州から半分ずつ負担される。

メルケル首相と州政府首相が 6 月 4 日に署名した三つの特別プログラム*のうち、「研究と技術革新のための協定」の継続では、DFG や MPG などの研究 (助成) 機関に 2015 年まで年間予算の 3% 増額を保障している。

GWK はその他 18 大学の研究施設の建設のために、3 億 4000 万ユーロを調達することを決議した。その上、GWK 議長のツォルナー氏は学術評議会 (WR) 及び DFG とともに、研究者養成の助成制度改善についても協議する予定と語っている。

しかしながら、ブランデンブルク州、ブレーメン市、メクレンブルク・フォアポンメルン州などの財政の厳しい州はこの決議に批判的であり、ドイツ連邦財政大臣、ペア・シュタインブルック氏 (社会民主党) も不安定な予算状況を指摘している。

*大学協定 II、エクセレンス・イニシアティブ、研究と技術革新のための協定 (ぼんぼん時計第 24 号 1-7 参照)

(ボンセンター)

1-2 新任教授数が減少－女性教授は更に減

dpa Kulturpolitik Nr. 25/ p. 25 2009 年 6 月 15 日参照

ドイツの大学で 2008 年度新しく教授になった人の数は前年と比べて減少した。連邦統計局の発表によると、2008 年度教授資格の取得者数は 1800 人で 4% の減少であった。大学教授資格取得者の数が 2302 人だった 2002 年と比べるとその数は 28% も減少したことになる。また、女性の大学教授資格者の人数も依然少ない。

統計局によると、大学教授資格取得者総数の減少要因は、伝統的な大学教授資格を取る方法に変わるやり方として、ジュニアプロフェッサーのポストを導入したためだと見られている。ジュニアプロフェッサー制度は、2002 年当時の連邦教育大臣エーデルガート・ブルマーン氏が、優秀な若手研究者が国外に流出する要因の一つと見られていた従来の大学教授資格に代わるものとして創設した。ジュニアプロフェッサーは博士課程終了後すぐに大学で教育・研究に携わることができるが、俸給は教授より少ない。

統計局の発表では 2002 年度は 102 人であったジュニアプロフェッサーも、2007 年には 802 人と増加している。教授の総数も 2002 年から 2007 年の間に 159 人増加し、3 万 8020 人であった。新任教授のうち、女性の割合は 23% と少数である。その割合は 2008 年度、前年比で 1% 減少した。学生が女性教授に接する可能性が一番高いのが言語学・文学の講義とされ、2008 年度当該分野では教授の 35% が女性となっており割合が一番高い。一方、数学や自然科学の分野では大学教授資格を取得した女性の割合はわずか 15% にすぎない。全体的に見て 2008 年度新任教授の数が一番多いのが人間医学、健康科学の分野で、これはここ数年横ばいである。この分野で大学教授資格を取得する人の割合は全体のほぼ半分を占める。統計局の発表によると、その次に多いのが言語学・文学の分野で 19%、数学・自然科学は 18%、法律・経済・社会学は 10% となっている。

(ボンセンター)

1-3 エクセレンス・イニシアティブ新たなフェーズへ

DFG プレスリリース 2009 年 7 月 2 日参照

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/pressemitteilungen/2009/presse_2009_30.html

DFG は 7 月 1 日の年次総会において、エリート大学選抜事業であるエクセレンス・イニシアティブの新規ロードマップを発表した。ドイツの大学は、2010 年春にこの先端研究における新規プロジェクトの申請草案提出を呼びかけられる。

第 2 回エクセレンス・イニシアティブのロードマップは以下のとおり。

2010 年

春：プロジェクト公募案内

秋：プロジェクト予備申請受付締切

2011 年

春：予備申請審査結果の発表

秋：本申請（予備申請通過大学および第 1 回エクセレンス・イニシアティブ採択大学からの延長申請が対象）

冬：本申請審査開始

2012 年

夏：最終審査結果の発表

このエクセレンス・イニシアティブの新たな段階に対しては合計 27 億ユーロが用意されている。これは、第 1 回エクセレンス・イニシアティブにおける第 1 期および第 2 期公募時の額より 30% 超となっている。それゆえ、新たな構想や申請にも公平なチャンスが与えられるとクライナー会長は述べている。27 億ユーロは、その 75% が連邦政府によって、25% が州政府によって支援される。

2009 年 6 月初め、連邦と各州政府は、①エクセレンス・イニシアティブ、②研究とイノベーションの協定、③大学協定 II、の実施のために 2018 年までに合計 180 億ユーロを投入することを決定した。このうち 50 億ユーロが DFG に、その基礎研究分野支援に充てられる。クライナー会長は「政治は、この決定にともない勇気と将来への展望を示した。彼らは、我々がここ数カ月ずっと言ってきたことを理解するにいたった。経済危機を乗り越えるため、学術と研究によりいっそう投資がされなければならない。学術と研究はイノベーション、そして後世の成長と幸福のための最たる基礎である。」と強調している。

DFG の新たなテーマ

上記年次総会においては、DFG の今後の活動テーマも合わせて発表された。

（参照 HP は上記と同じ）

機会均等

昨年、DFG の年次総会において導入が決定された「研究分野における機会均等の基準」は、すべてのキャリアステージにおける女性研究者数の明確な向上を目的としている。DFG 会員であるすべての大学および多数の研究機関は、この機会均等の基準を受け入れた。今後、基準受入れ機関には名付けて「Instrumentenkasten* (インストゥルメンテンカステン)」という、研究分野における機会均等推進事業の好例を検索できるオンラインシステムが用意される。

*参考：<http://www.instrumentenkasten.dfg.de/>

ヨーロッパでの研究

DFG のヨーロッパ戦略に関する政策方針書（「Europa-Papier」）も合わせて発表された。これはヨーロッパ研究圏および、ヨーロッパ研究助成連盟 (European Research Grant Union) の構想進展を目標としている。研究者が研究活動に伴う転居を必要としたヨーロッパ内の移動の際でも、既得助成金が引き続き使用できるようになるなど更なる研究環境改善を図り、ヨーロッパの研究競争性を高めることとしている。

より柔軟性のある助成プログラム

クライナー会長は、来年には DFG 助成プログラムのさらなる柔軟化と細分化を行うことも宣言した。それにより、それぞれの申請者および各プロジェクトの要求に合わせて、よりよい支援体制が作られることになる。

1-4 ドイツ医学博士号の質に疑問

dpa Kulturpolitik Nr. 28/ p. 24 2009 年 7 月 6 日参照

ドイツの医学博士号「Dr. med.」は欧州連合で他の多くの近隣諸国の博士号取得の際に求められる業績と同等とはみなされていないと、学術評議会 (WR) の学術委員会会長ウルリケ・バイジエールが指摘した。そのため、ドイツの若い医学者は事実上、欧州研究評議会 (ERC) の助成金の対象から除外されていると、ハンブルクの生物化学者が雑誌「研究と教育」(7月号)に寄稿した論文の中で述べた。

医学部卒業生の80%は博士号を取得して学部を卒業するが、その理由は医者として職業的、社会的に認められるかどうかは博士号の有無にかかっているからだとされる。博士論文は通常修学中に書かれ、そのレベルは多くの場合、自然科学系学科のディプロム*論文と変わらない。バイジエール会長は、学術的に見て論拠もかなり不十分なことが多いこの医学博士論文は、新しい見識をもたらすことがほとんどなく、形式的な研究だと呼ばれているゆえんだと批判している。

それゆえ学術評議会は、医学博士論文のレベルを他の学科の博士論文のレベルに上げるため、博士課程は研究を志す医学生に限られるべきであり、それ以外の医学部卒業生には将来医師免許を

取得した時、「Medizinischer Doktor (医師)」という職業名を授与されるべきであるとの見解を下しており、医学部での修学と博士課程を明確に区別することに賛同している。

※ドイツの伝統的な学位。日本では修士レベルに相当。

(ボンセンター)

1-5 ドイツ研究協会(DFG) 研究助成ランキングを発表

dpa Kulturpolitik Nr. 38/ p. 8-10 2009 年 9 月 14 日参照

DFG プレスリリース 2009 年 9 月 10 日参照

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/pressemitteilungen/2009/presse_2009_46.html

DFG は 1997 年から 3 年毎に実施してきた助成ランキングの最新版を発表した。このランキングは DFG が支出する 20 億ユーロ強の助成金を中心に、教育・研究省などの連邦政府、ドイツ学術交流会 (DAAD) やフンボルト財団 (AvH) などの各種助成機関のほか、欧州連合による助成金データも対象となっており、ドイツの大学や研究機関が獲得する全外部資金の約 90%を把握している。

DFG 助成金ランキング 2009 は、ドイツの大学における外部資金配分及び重点研究分野に関してのこれまでのように包括的な見通しかつ詳細な分析となり、他の数多くのランキングとは一線を画する。すべてのデータは助成している団体・機関から直接得られたものであり、現場で活動する研究者あるいは大学等がこのデータ集めに奔走しなけりばならなかったという機関は皆無とのこと。200 ページ以上に及ぶ報告書の全内容を紹介することはできないが、プレスリリースをもとにかいつまんで報告する。

DFG 助成金配分ランキング

配分合計トップ 10 大学 (2005-2007 年)

順位	大学名	助成金額(€)
1	アーヘン工科大学	2 億 5700 万
2	ミュンヘン大学	2 億 4900 万
3	ハイデルベルク大学	2 億 1540 万
4	ミュンヘン工科大学	2 億 40 万
5	ベルリン自由大学	1 億 9440 万
6	フライブルク大学	1 億 6550 万
7	カールスルーエ工科大学	1 億 5940 万
8	エアランゲン-ニュルンベルク大学	1 億 5760 万
9	ゲッティンゲン大学	1 億 5350 万
10	ベルリン・フンボルト大学	1 億 5340 万

2005-2007 年にわたり、DFG からの助成金配分額 1 位はアーヘン工科大学。同大学は、DFG から 2 億 5700 万ユーロの助成金を獲得し、前回 1 位のミュンヘン大学を抑えた。第 2 位のミュンヘン大学は、DFG からの外部資金 2 億 4900 万ユーロを獲得。大きく差をあけて、第 3 位ハイデルベルク大学、第 4 位ミュンヘン工科大学、第 5 位ベルリン自由大学と左表のとおり続く。上記期間において最も助成金を獲得した上位 20 大学は、全 DFG 助成資金の 60%以上を有しており、さらに上位 40 大学まで含めた場合 88%

という数字となる。多くの大学はここ数年間でそれぞれの研究の特色を明確に打ち出し、学術研究における国内外の競争に順調に対応していると、DFG のクライナー会長は述べている。また、ドイツの大学及び研究機関は第 6 回欧州連合研究プログラム (FP6) の枠内で外部資金をヨーロッパ中から調達しており、調達した外部資金の割合は一番高く、総額 3 兆 240 億ユーロである。これは全助成額の 18%にあたる。

2006 年に創設された連邦と州のエリート大学選抜プログラム「エクセレンス・イニシアティブ」が当該ランキングで考慮されたのも初となる。エクセレンス・イニシアティブの採択でランクを顕著に上げた大学がいくつかあると指摘されており、例えば、ベルリン自由大学は 2006 年の 10 位から 5 位に、フライブルク大学は 11 位から 6 位に、ゲッティンゲン大学は 12 位から 9 位にランクが上がった。ランキングトップ 10 には入っていないが、エクセレンス・イニシアティブ将来構想部門 (エリート大学) で採択されているコンスタンツ大学は大きく飛躍し、34 位から 16 位となった

地域クラスター

助成金の地域的な配分について。ここではベルリン地域とミュンヘン地域が、その非常に活動的な大学外研究機関・施設の立地により、それぞれ約 5 億 2000 万ユーロが配分され、とりわけ助成金獲得が高い地域として示されている。他の地域としては、アーヘン、ボン、ケルン地域がユーリッヒ研究センターと共同で 5 億 5000 万ユーロ以上の配分。同様に、ライン・ネッカー地域、フランクフルト・ライン・マイン地域、ライン・ルール地域、ハノーファー・ブラウンシュバイク・ゲッティンゲン地域。「産業との結びつきが増えて、地域の研究連合の意義が高まることになる。」とクライナー会長は述べる。

国際的な魅力

AvH 財団による研究員受入数 (2003-2007 年) DAAD による研究員受入数 (2005-2007 年)

順位	大 学 名	(人)
1	ミュンヘン大学	250
2	ベルリン自由大学	209
2	ベルリン・フンボルト大学	209
4	ハイデルベルク大学	167
4	ミュンヘン工科大学	167

順位	大 学 名	(人)
1	ベルリン・フンボルト大学	176
2	ベルリン自由大学	173
3	カッセル大学	107
4	ゲッティンゲン大学	93
5	ライプツィヒ大学	90
5	ミュンヘン大学	90

フンボルト財団 (AvH) とドイツ学術交流会 (DAAD) とのフェローシップによる海外からの研究員受入人数から、国際的に魅力があるドイツの大学はベルリン・フンボルト大学とベルリン自

由大学、そしてミュンヘン大学との結果が示された。外国研究者の大部分が当該大学にて研究滞在していた。

女性研究者の動向

女性研究者の助成金獲得をめぐる競争への参加についても同ランキングが初となる数字を公表した。「学術における機会均等という重要な課題において、より一層透明性を創出する。」とクライナー会長は述べる。報告書では、大学での 18,000 人以上にのぼる DFG 助成金獲得者のうち 16%が女性であるということを示しており、拠点および学問領域間でかなりの差があるものとしている。大学名の記載はないが、ランキングトップの大学では、助成金獲得者のうち 36%が女性研究者であった。

(ボンセンター)

2. ボン研究連絡センターの活動

2-1 ドイツ研究協会(DFG)年次総会出席

月日：2009 年 7 月 1 日

場所：ライプツィヒ大学（ザクセン州ライプツィヒ市）

7 月 1 日、ライプツィヒにて DFG の年次総会が開催された。ボンセンターからは宮元副所長と濱田国際協力員が参加し、DFG の今後の動向を把握するとともに関係者との懇親を深めた。総会では Annette Schavan 連邦教育研究大臣等、学術関係者からの挨拶に引き続き、2007 年 1 月から会長を務めている Matthias Kleiner 教授が次期会長に再選されたことが報告された。2010 年 1 月からの 3 年間、DFG は引き続き同会長のイニシアティブのもと、ドイツ学術振興に向けた事業を実施することとなる。また、前項 1-3 で記載したとおり、エリート大学選抜事業であるエクセレンス・イニシアティブの新規ロードマップや核となる三つの活動テーマが発表され、同会のより積極的な方針が打ち出された。

(宮元)

2-2 ゼンケンベルク自然博物館訪問

月日：2009 年 7 月 21 日

場所：ゼンケンベルク自然博物館（ヘッセン州フランクフルト市）

年末に開催予定であるルードヴィッヒ・デーデルライン (Ludwig H.P. Doederlein) 博士来日 130 周年を記念したシンポジウム打合せのため、小平所長と宮元副所長がゼンケンベルク自然博物館の Dr. Joachim Scholz 氏を訪問した。ゼンケンベルク自然博物館はフランクフルト大学に

隣接する自然科学系ではドイツ最大の博物館であり、その運営はゼンケンベルク自然研究協会からの補助金によって行われている。

シンポジウムのテーマであるデーデルライン博士は明治初期にいわゆる「お雇い外国人」として東京大学に在籍し、日本の貴重な動物学標本を多数ドイツに紹介した。相模湾の三崎付近で採取した海洋生物の研究成果は、昭和天皇の生物学研究にも大きな刺激を与えたとされている。12月6日に開催予定となった学術シンポジウムでは、海洋生物学研究における過去・現在・未来を討議するとともに、その一環として昭和天皇の研究功績を専門的見地から紹介することにより、日本における海洋生物学研究への一層の理解を深めてもらうことを目的としている。

デーデルライン博士：

(コトバンク HP 朝日本歴史人物事典)

<http://kotobank.jp/word/%E3%83%87%E3%83%BC%E3%83%87%E3%83%AB%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3>

(宮元)

2-3 ボン大学サマースクール開講式出席

月日：2009 年 8 月 5 日

場所：ボン大学 (NRW 州ボン市)

ボン大学が毎年この時期にインターナショナルサマースクールの開講に際し行っているもので、ボン大学附属のボタニカルガーデンが会場となった。ボン大学長 Jürgen Fohrmann 氏、ボタニカルガーデン技術者 (Techniker Leiter) Marcus Radscheidt 氏のあいさつに始まり、ミュージック、ビュッフェ形式の食事となった。参加者は300名前後、晴天の下、各国の学生が集まり盛大な催しとなっていた。



会場の様子

(濱田)

2-4 フンボルト財団 (AvH) 主催 フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者情報交換会参加

月日：2009 年 8 月 13, 14 日

場所：AvH 本部 (NRW 州ボン市)

本会は、これからフンボルト財団の奨学金を受けて海外へ派遣されるフェローへのオリエンテーションを中心とした会である。すでに海外での滞在を終えて帰国した者たちからの体験談や渡航の際の注意事項などを直接に聞ける場でもある。今回は、併せて約 30 名の奨学生 (Humboldtianer)

が参加した。日本へは、Dr. Stadler 氏 (京都大学)、Dr. Zahlten 氏 (明治学院大学) の 2 名が派遣される。そして、帰国したばかりの Dr. Michael 氏からは、2 年間の筑波における研究、生活、食文化そして旅行などについての紹介があった。

前回、ボン大学で開催された同種のオリエンテーションと比較して、今回はフンボルト財団本部での小規模な集まりであったが、その分参加者たちがお互いを知る機会としては前回より良いものであったと感じた。1 日目のフンボルト財団の助成プログラム紹介、フンボルト同窓会の紹介、夕食 (バーベキュー) に続き、2 日目には帰国者 2 名の体験談報告、派遣国・地域別の個別相談、若手研究者育成のためのプログラム紹介などが行われ充実した構成となっていた。JSPS ボンからは Albers 職員と横山国際協力員が両日、宮元副所長が 2 日目に参加し、日本渡航予定者への情報提供を行った。



日本での体験を報告する Dr. Michael 氏

(横山)

2-5 JSPS Abend(ボンセンター年次活動報告会)開催

月日 : 2009 年 9 月 2 日

場所 : La Redoute (NRW 州ボン市)

2009 年 9 月 2 日 (水)、当センターはボン市郊外の Bad-Godesberg に位置するかつての選帝侯の舞踏館 La Redoute において、JSPS Abend (学振のタベ) を開催した。JSPS Abend は、毎年晩夏の頃に近隣の対応機関、大学等諸団体の長をはじめとする関係者を招待し、当センターの活動報告を行うとともに、我々の活動への協力に感謝をし、更なる交流・協力の輪を拡げるための会である。

開会の挨拶では、急用で欠席となられた小野理事長の代理として、JSPS 学術システム研究センター副所長の黒木登志夫先生が JSPS の活動報告および協力に対する謝辞を述べられた。また、癌研究者として関わってこられたご自身の日独共同研究の一端を紹介し、特に 2008 年ノーベル医学・生理学賞受賞者であるドイツ癌研究センターの Prof. Dr. Harald zur Hausen 氏 (2006 年ボンセンター・ドイツ同窓会共催日独シンポジウム講演者) との深い交流は出席者の関心を引きつけた。また、十数回にも及ぶドイツ訪問によって学んだ数少ないドイツ語 (Hexenschuss など) の披露により会場の笑いを誘い、和やかな始まりとなった。

今年度は初めての試みとして、出席者に日本 (人) の研究を直接アピールすべく、当地で活躍中の日本人研究者にその研究内容の一端を紹介していただく時間を 20 分程度設けた。ドイツにて研究滞在する日本人研究者は多いが、常勤としてポジションを得ている研究者となると、当セン

ターで把握する限りでもほんの一握りに過ぎない。在独日本大使館では、ドイツにて研究滞在する日本人のためのネットワーク形成を支援している^{※1}が、常勤日本人研究者の動向については JSPS が把握している研究者とほぼ同一のようである。今回、講演をしていただいたハイデルベルク大学の Prof. Dr. Motomu Tanaka 氏^{※2}はその一人であり、JSPS の特別研究員だけではなく、対応機関であるフンボルト財団フェローシップ、また、外国人としては初めて DFG の Emmy Noether Programme^{※3}にも採用されている。Tanaka 先生には「*Fine-Adjustment of Complex Interactions across Interfaces*」という題目でその独創的な研究内容を紹介していただくとともに、日独の研究助成機関からの支援に対する感謝や、ご自身のキャリア形成に基づいた若手研究者育成の重要性も熱く語っていただいた。終了後の拍手の大きさが、講演の印象深さを物語っていたと思う。

なお、直前に、田中靖郎前 JSPS ボンセンター長のこれまでの日独学術交流促進への貢献を称えた 2009 年外務大臣表彰授与という喜ばしいお知らせがあったため、プログラムには盛り込むことは出来なかったが、そのご報告と田中前センター長からのご挨拶をいただいた。また、会終盤には急遽の DFG の Kleiner 会長からも賛辞をいただき、JSPS の活動が改めて高く評価されていることが伺えた。今年度も 100 名を超える参加者が集い、日独学術交流の意義と展望と語り、JSPS の活動と動向の理解促進を深める貴重な機会となった。

※1. ドイツ研究者ネットワーク HP <http://www.de.emb-japan.go.jp/nihongo/kenkyusha/index.html>

※2. Tanaka 先生の研究室 HP <http://www.pci.uni-heidelberg.de/bpc2/>

※3. Emmy Noether Programme : 2～4 年（医学の場合は 6 年まで）のポストドク経験および十分な国際的研究の経験を持つ若手研究者に対し、独立した研究グループリーダーとして活動するための資金を 5 年間提供する。



黒木登志夫 JSPS 学術システム研究センター副所長による挨拶



Prof. Dr. Motomu Tanaka による学術講演

(宮元)

2-6 ケルン日本文化会館主催・JSPS 共催シンポジウム「高齢化社会-都市生活とライフクオリティー」

月日 : 2009 年 9 月 8 日

場所：ケルン日本文化会館（NRW 州ケルン市）

9 月 8 日ケルン日本文化会館を会場として「高齢者の生活の質-ドイツと日本 お互いに何を学べる？」と題したシンポジウムが開催された。当シンポジウムはケルン日本文化会館の開設 40 周年記念事業の一つであり、NRW 州イノベーション・学術研究・科学技術省（MIWFT）、ドルトムント専門大学、JSPS が共催して行ったものである。

シンポジウムは MIWFT 事務次官 Stückradt 氏の挨拶に始まり、元連邦家族・老人・女性・青少年省大臣の Ursula Lehr 氏、明治学院大学の服部圭郎氏、ドルトムント専門大学老齢医学研究所の Eckart Schnabel 氏、お茶の水女子大学長の羽入佐和子氏の 4 名による講演とパネルディスカッション、最後にケルン文化会館長上田浩二氏の挨拶で締めくくられた。



パネルディスカッションの様子

講演はドイツと日本の高齢化の推移とドイツの高齢化の現状、日本の高齢者率の高い村の取り組み、高齢化社会におけるドイツと日本の共通点と違いについて哲学的な視点を交えるなど幅広い内容となった。参加者はおおむね 100 名前後。講演終了後の質疑応答も活発に行われ、質問者も関係分野の研究者のみならず百貨店関係者、老人福祉施設で働く人など様々で、このテーマが一般のドイツ人にとっても非常に関心の高い問題であることが伺えた。

(濱田)

2-7 田中靖郎 前ボン研究連絡センター長 外務大臣表彰授賞式出席

月日：2009 年 9 月 29 日

場所：在独日本大使公邸（ベルリン市）

JSPS ボン研究連絡センターの前所長である田中靖郎先生が平成 21 年度外務大臣表彰を受賞され、当センターから小平所長と宮元副所長が授賞式に出席した。表彰は、田中先生のこれまでの日独相互理解の促進における功績を称えたもので、当センターの他、JSPS ドイツ同窓会員、フンボルト財団幹部や親交の深い研究者等 40 名程が田中先生を祝福するため駆け付けた。



田中先生ご夫妻と神余大使ご夫妻

在独日本大使館神余大使から、これまでの研究業績とともに当センター所長として JSPS の知名度を飛躍的に高め、日独学術ネットワーク形成を促進してきた功績が述べられると、出席者から

は盛大な拍手が送られた。音楽演奏を挟み、田中先生ご夫妻を囲んだ懇親会では、出席者との会話が尽きることなく、終了後も別れを惜しむ姿が多数見受けられた。

(宮元)

2-8 ドイツ語圏日本研究者会議参加

月日：2009 年 10 月 1 日

場所：ハレ大学（ザクセン・アンハルト州ハレ市）

9 月 29 日～10 月 2 日にわたりハレ大学を会場として「第 14 回ドイツ語圏日本研究者会議」が行われた。これはドイツ語圏にて日本関係を研究する研究者が一堂に参加する会議であり、3～4 年に一度、日本学のある大学を会場として総会を開催している。期間中は、日本をキーワードとして主に人文社会科学分野からなるパラレルセッションが実施され、大学院生を含めて研究者 200 名以上の参加者を集める。JSPS からは学術システム研究センター相談役の石井紫郎先生がオープニングにて基調講演を行い、当センターから小平所長が「日本学における研究助成哲学とその戦略」と題されたパネルディスカッションにてパネリストとして参加した。

パネルディスカッションには、ドイツ学術交流会（DAAD）、連邦教育研究省（BMBF）、国際交流基金ケルン日本文化会館も招待され、当該分野における日独の研究・学生・文化交流の概要や状況と展望が議論された。

10 月 1 日には、JSPS ドイツ同窓会 Menkhaus 会長の協力のもと、当センター主催でこの会議に参加する元 JSPS フェローと対応機関等の関係者を招待した懇親会の場を設け、情報交換や同窓会活動の周知を行った。



Prof. Dr. Menkhaus 同窓会長による挨拶（隣は石井紫郎先生）



小平所長によるパネルディスカッションでの講演

(宮元)

2-9 来訪&訪問、会議出席等

【7 月】 _

- 07 月 01 日 (水) 宮元副所長、濱田国際協力員がベルリン工科大学で 2009 年 JSPS 国際事業プロモーションイベント実施の打合せ (於ベルリン)
- 07 月 01 日 (水) 宮元副所長、濱田国際協力員が DFG 年次総会出席 (於ライプツィヒ)
- 07 月 02 日 (木) 小平所長が調査研究のため一時帰国 (～10 日)
- 07 月 09 日 (木) 福岡工業大学 西村重雄教授が日独交流プログラム情報収集のため来訪
- 07 月 21 日 (火) 小平所長、宮元副所長がシンポジウム打合せのためゼンケンベルク自然博物館を訪問 (於フランクフルト)
- 07 月 22 日 (水) ドイツ研究協会 (DFG) スタッフとのランチミーティング (於ボン)
- 07 月 23 日 (木) 連邦教育研究省 (BMBF) スタッフとのランチミーティング (於ボン)
- 07 月 24 日 (金) 小平所長が調査研究のためマックス・プランク電波天文学研究所訪問 (於ボン)
- 07 月 28 日 (火) ドイツ学術交流会 (DAAD) アジア・オセアニア担当課長 Dr. Toyka-Fuong がプログラム情報収集のため来訪

【8 月】 _

- 08 月 04 日 (火) 鶴見大学前学長 柳澤慧二教授が表敬訪問
- 08 月 05 日 (水) 濱田国際協力員、横山国際協力員がボン大学サマーコース開講式出席
- 08 月 13 日 (木) 山口大学留学生センター長 Prof. Dr. Franz Hintereder-EmdeIrmeka が日独交流プログラム情報収集のため来訪
- 08 月 13 日 (木) 宮元副所長 (14 日のみ)、Albers 職員、横山国際協力員がフンボルト財団主催フェオドリア・リュウネン・フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者情報交換会出席 (於ボン) (～14 日)
- 08 月 24 日 (月) DFG スタッフとのランチミーティング (於ボン)
- 08 月 26 日 (水) 在独日本大使館 福井一等書記官が JSPS Abend 打合せのため来訪
- 08 月 28 日 (金) 小平所長が JSPS Abend 打合せのためハイデルベルク大学 Prof. Dr. Motomu Tanaka を訪問 (於ハイデルベルク)

【9 月】

- 09 月 02 日 (水) JSPS Abend (ボンセンター年次活動報告会) 開催 (於ボン)
- 09 月 09 日 (水) ケルン日本文化会館創立 40 周年記念、NRW 州イノベーション・学術研究・科学技術省、ドルトムント工科大学、JSPS 共催シンポジウム開催 (於ケルン)
- 09 月 13 日 (日) JSPS 本部研究協力第一課 河村裕美課長、大場博哉専門職員、齋藤秀人国際協力員が、DFG 主催マルチファンド枠組みを協議する実務者会議 (GPC meeting) 出席のため来訪 (～16 日まで)

- 09 月 14 日 (月) JSPS 本部代表团と DFG との打合せに小平所長と宮元副所長が陪席
- 09 月 15 日 (火) JSPS 本部代表团の DAAD 訪問に宮元副所長が同行
- 09 月 25 日 (金) 小平所長、宮元副所長、横山国際協力員が JSPS、JSPS 仏同窓会及び独同窓会共催フォーラム (2010 年 5 月開催) 第 3 回準備会合に出席 (於ボン)
- 09 月 28 日 (月) 小平所長、宮元副所長および Schulze 職員が JSPS 事業経験者追跡調査実施打合せのためドルトムント専門大学 Dr. Stefan Hochstadt 氏を訪問
- 09 月 29 日 (火) 小平所長、宮元副所長が田中靖郎前ボンセンター所長の外務大臣表彰授賞式出席 (於ベルリン)
- 09 月 29 日 (火) Schulze 職員、横山国際協力員が NRW 州大学国際化調査のため NRW 州イノベーション・学術研究・科学技術省 Ms. Martina Munsel 国際課副課長を訪 (於デュッセルドルフ)
- 09 月 30 日 (水) 小平所長、宮元副所長、Albers 職員がドイツ語圏日本研究者会議参加 (～10 月 2 日) (於ハレ)

2-10 その他の活動

- ・ ドイツ語版ニューズレター (ルンド・シュライベン) 等の作成・配布
- ・ 各種照会、情報収集・調査、情報提供業務
- ・ 訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・ 日本の大学等紹介及び渡日プログラム紹介イベント (2009 年 10 月開催) 準備
- ・ 第 6 回日独コロキウム (2010 年 2 月開催) 準備
- ・ 第 1 回日仏独共催フォーラム (2010 年 5 月開催) 準備

3. 今後の予定

2009 年

- 10 月 16 日 (金) 日本の大学及び渡日プログラム紹介イベント開催 (於ベルリン)
- 10 月 16 日 (金) JSPS ドイツ同窓会主催「会員による会員の招待」イベント参加 (～17 日) (於ベルリン)
- 10 月 19 日 (月) 小平所長、宮元副所長が日独交流 150 周年記念事業第 2 回検討会議出席 (於ベルリン)
- 10 月 21 日 (水) 小平所長、宮元副所長、濱田国際協力員、横山国際協力員がダルムシュタット工科大学-早稲田大学日独共同大学院シンポジウムに出席 (於ダルムシュタット)
- 10 月 29 日 (木) 宮元副所長、濱田国際協力員が NRW 州大学授業料調査のため NRW 州イノベーション・学術研究・科学技術省 Ms. Martina Munsel 国際課副課長を

- 訪問 (於デュッセルドルフ)
- 11 月 09 日 (月) 小平所長が日独科学技術合同委員会出席 (～10 日) (於ボン)
- 11 月 11 日 (水) 宮元副所長、横山国際協力員が JSPS 研究事業部によるドイツ研究費・研究環境等調査へ同行 (～17 日)
- 12 月 06 日 (日) ゼンケンベルク自然博物館主催・JSPS 共催シンポジウム開催 (於フランクフルト)

2010 年

- 01 月 30 日 (土) 仏独 JSPS 同窓会及び JSPS 共催フォーラム第 4 回準備会合 (於ストラスブール)
- 02 月 08 日 (月) 小平所長が第 2 回 JSPS-DFG 共催ラウンドテーブルに出席 (於東京)
- 02 月 17 日 (水) 第 6 回日独コロキウム開催 (於コットブス) (～20 日)
- 04 月下旬 JSPS サマープログラムプレオリエンテーション開催 (於ボン)
- 05 月 21 日 (金) 第 1 回仏独 JSPS 同窓会及び JSPS 共催フォーラム開催 (於ストラスブール) (～22 日)
- 09 月 13 日 (月) 日独交流 150 周年記念シンポジウム開催 (於東京) (～15 日)

4. センター長雑感

ボンでの一年が過ぎた。慌ただしかった昨年に比べ、いろいろな行事を一回り勉強し終えた今年の夏は、ライン川畔での生活を、いくらか楽しむこともできた。ドイツの人口は日本の 8 割。面積はほぼ同じ。日本は平地が 2 割、ドイツは山地が 2 割。したがって一人当たりの利用可能面積はドイツが日本の 5 倍。これが街や住居のゆとり、食料自給率にも反映する。台風、地震と厳しい反面、四季豊かな自然の中で、日本列島に住む日本人は、本当に良く頑張っている。近代帝国としての発足は、日本が 1868 年、ドイツが 1871 年。第二次世界大戦後に経済復興を成し遂げ、世界勢力に再び咲いた両国は、さまざまな面で良きパートナーである。中国・インドの台頭、欧州連合拡大強化の中で、中堅国家として、どのような将来像を描けるのか。国政選挙を終えて、両国ともに新たな秋を迎えようとしている。

(小平)

ぼんぼん時計第25号
日本学術振興会ボン研究連絡センター
JSPS Bonn Office
Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)
Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)
Phone +49 (0) 228-375050 Fax +49 (0) 228-957777
www.jsps-bonn.de